

# SHOW-HEYシネマルーム

Data

監督・脚本：アンジェイ・ワイダ  
原作：アンジェイ・ムラルチュク『カ  
ティンの森』（集英社文庫刊）  
出演：マヤ・オスタシェフスカ／ア  
ルトゥル・ジミエウスキ／  
ヴィクトリヤ・ゴンシェフス  
カ／マヤ・コモロフスカ／ヴ  
ワディスワフ・コヴァルスキ  
／アンジェイ・ヒラ／ダヌ  
タ・ステンカ／ヤン・エング  
レルト／アグニェシュカ・グ  
リンスカ

## カティンの森

2007年・ポーランド映画  
配給／アルバトロス・フィルム  
122分

2009（平成21）年11月12日鑑賞

GAGA試写室

### 👁️👁️ みどころ

映画は観て楽しむもの、明るく笑って明日への糧とすべきもの。そういう考え方もあるが、本作はそうではなく、学ぶためのものだ。あなたは、ポーランドの巨匠アンジェイ・ワイダ監督を知ってる？カティンの森での大虐殺を知ってる？戦後日本はアメリカに占領されたが、もし北海道や東北地方がソ連に占領されていたとしたら？

そんな想像をめぐらせながら本作を鑑賞すれば、きっと戦慄を感じるはず。そして、歴史を語り伝えることの大切さに心震えるはずだ。すごい映画が登場！こりゃ必見！

### すごい映画が登場！こりゃ必見！

『SHOW-HEYシネマルーム』は今年12月に『シネマ23』が出版されるが、そこでは第3章「こんな問題作に注目！」の中に、「あの虐殺を考える」と題するテーマで『セントアンナの奇跡』（08年）と『戦場でワルツを』（08年）を評論した。

スパイク・リー監督のアメリカ、イタリア映画である『セントアンナの奇跡』はセントアンナの大虐殺を、アリ・フォルマン監督のイスラエル、ドイツ、フランス、アメリカ合作、イスラエル映画である『戦場でワルツを』はサブラ・シャティーラの虐殺をテーマとした問題作だが、さてカティンの森事件（カティン虐殺事件）とは？

### アンジェイ・ワイダ監督とは？

ポーランドには2009年9月11日に観た『アンナと過ごした4日間』（08年）のイェジー・スコリモフスキ監督や『戦場のピアニスト』（02年）のロマン・ポランスキー監

督が有名だが、本作で私はポーランド人監督のアンジェイ・ワイダ監督をはじめて知った。軍人だった彼の父親は本作が描いたカティン虐殺事件で他のポーランド人将校とともにソ連軍によって虐殺されたらしい。そして、母親も夫の帰還の望みが薄れていく中で死亡したとのことだ。

そんな原体験をもつ虐殺被害者の息子としては、カティンの森事件の真相究明はもちろん、映画監督としてその映画化を熱望したのは当然だろう。その映画化への道程の苦勞はプレスシートの中に詳しく書かれているが、過去たくさんの作品を監督してきたアンジェイ・ワイダ監督にとって本作の完成は感無量のことだろう。彼は1926年生まれだから2009年の今すでに83歳だが、本作のような歴史の「語り部」としてまだまだ現役で頑張ってもらわなくっちゃ。

## 印象的な冒頭シーンは、悲劇的な挟み撃ち

太平洋戦争末期における沖繩戦の悲劇は『ひめゆりの塔』（82年）、『ひめゆり』（06年）などでよく知られている。米軍の圧倒的な攻撃によって組織的な抵抗力を失った日本軍と住民たちが南へ南へと逃げて行ったのは当然。もちろん南へ逃げて行っても助かる保証は何もないのだが、とにかく追ってくる敵から逃げる方向が定まっているというのはある意味ありがたいこと。本作の冒頭シーンをみていると、ついそんなことを考えてしまう。

ヒトラー率いるナチスドイツ軍のポーランド侵攻は1939年9月1日だが、本作の冒頭シーンは同年の9月17日。舞台はポーランド東部ブク川の橋の上だ。ドイツ軍に西から追われて東に逃げていく人々とともに今東に向かっているのは、本作の主人公であるアンジェイ大尉（アルトゥル・ジミエウスキ）の妻アンナ（マヤ・オスタシェフスカ）とその娘ヴェロニカ（ヴィクトリヤ・ゴンシェフスカ）。この2人はクラクフという土地から夫の安否を心配して東へ向かっていたわけだが、これを発見したのは逆にソ連軍に追われて東から西に逃げて今ブク川の橋の上にやってきたルジャ大将夫人（ダヌタ・ステンカ）。ルジャは、東はすでにソ連軍に占領されたから東へ行くのは中止しなさいと懸命に呼びかけたが・・・。

## 多様な悲劇のサマが重層的に

本作のストーリーの基になったのは、ソ連軍の捕虜となったアンジェイ大尉が手帳に書き残していた日記。そしてストーリーの軸になるのは、一度はソ連軍の捕虜となったアンジェイ大尉と出会えたにもかかわらず、ソ連軍の軍用列車で東へ連行されることになったアンジェイ大尉の消息を気遣う妻アンナやアンジェイ大尉の母親（マヤ・コモロフスカ）たちの物語だ。しかし、何十回と構想が練り直された本作では、そのメインストーリー以外にも、コジェルスク収容所に抑留された大将とその妻ルジャの物語、ヤギェロン大学の教授をしているアンジェイ大尉の父ヤン教授（ヴワディスワフ・コヴァルスキ）と、その大学の教授たちの物語、カティンの森で犠牲となったピョトル中尉（パヴェウ・マワシンスキ）とその墓碑を作るために奔走する妹アグニェシュカ（マダレナ・チェレツカ）の物語、などが重層的に積み上げられていく。

スクリーン上で展開されるそんな多様な悲劇のサマを見れば、憲法9条<戦争の放棄>を守れば戦争のない世の中がで、世界平和が実現するなどノー天気なことを言っていられないことがよくわかるはずだ。

## 衝撃的なラスト30分に注目

前述のように、本作のストーリーの基はアンジェイ大尉の日記だが、これは『アンネの日記』ほど有名な日記ではない。また、一時はナチスドイツによる蛮行とされていたカティンの森事件は今ではソ連軍によるものだということが確立しているが、それは1990年にソ連政府がこの蛮行はソ連の内務人民委員部(後のKGB)による犯罪であることを認めた結果だ。そして、アンジェイ大尉の日記が本作のストーリーの基とされたのは、カティンの森の発掘調査によってアンジェイ大尉の日記が発見されたためだ。

しかしその日記に書かれていたのはある月のある日までであって、それ以降は全くの白紙。アンジェイ大尉は目撃したすべてを手帳に書き留めようと心に決め、実行していたはずなのにそれは一体なぜ?それは誰でもわかることだが、本作が描く衝撃的なラスト30分の「これぞ虐殺」と思わず息を呑むシーンは、アンジェイ大尉の日記にもとづくものではなく、アンジェイ・ワイダ監督の想像力によるもの?

## もし日本がソ連に占領されていたら?

日本は島国だから、はるか昔蒙古(元)に攻められた時くらいしか外敵の攻撃にさらされたことがない。19世紀末南下政策をとったロシアに対しても、日本本土を戦争に巻き込むことなく1904~05年の日露戦争によって勝利することができた。しかし、「先の大戦」すなわち太平洋戦争で敗北した日本がアメリカの占領ではなく、日ソ不可侵条約を破って1945年8月9日満州・樺太の北方から侵入してきたソ連軍によって占領されていたとしたら?歯舞、色丹、国後、択捉の北方4島の返還をめぐる日ソの交渉は今なお続いているが、もし北海道や東北地方さらに北陸地方までソ連に占領されていたとすれば、ドイツとソ連の両国に占領されたポーランド同様、日本も悲惨な状態になっていたはずだ。

虐殺の舞台となったカティンはソ連領だったが、1941年秋からは独ソ戦線が東に移動したためドイツに占領された。ところが1943年6月以降独ソ戦線が西に移動したため、同年9月にはカティンはソ連によって解放され、ソ連領となった。

他方、アンナや娘のヴェロニカたちが住むポーランドのクラクフのまちも1939年9月以降ドイツに占領されていたが、1945年1月18日ソ連軍によって解放された。しかし、1945年にはポーランドという国自体がソ連の衛星国としてのポーランド人民共和国となってしまった。また、ポーランド人民共和国からポーランド共和国に「衣替え」した1990年には、やっとゴルバチョフソ連大統領がカティンの森虐殺事件を自国の犯行と認めてポーランドに謝罪したが、ことほど左様にポーランドという国はドイツとソ連

によって振り回され続けてきたわけだ。そして、ドイツとロシアによるポーランドに対するさまざまな政治的・軍事的影響は今なお続いている。

そう考えると、民主主義国アメリカに占領され、1951年のサンフランシスコ講和条約によって独立を回復した後、強固な日米同盟まで結ぶことができた日本は幸せ？

2009(平成21)年11月18日記



## 「カティンの森」

(来年1月9日からシネ・リーブル梅田で公開予定)

### ワイダ監督の魂の叫びをどう受け止める？

「戦場ワルツを」(2008年)はサブ・シヤティラの虐殺を「セントアンナの奇跡」(同年)はセントアンナの大虐殺をそれぞれ描いたが、カティンの森虐殺事件とは？ 1939年9月のナチスドイツによる西からの侵攻直後に、東からソ連の侵攻にさらされたポーランドは悲惨なため戦後復興と経済成長

は「アンネの日記」と同じく貴重なものだが、その記載がある日を境に途切れたのはなぜ？ 本作はポーランドの巨匠アンジェイ・ワイダ監督の父親への鎮魂歌。それは大尉こそ監督の父親その人だからだ。本作には大尉とその妻子の他、大学教授だった大尉の父親や収容所に抑留された大尉とその妻など多彩な人物が登場し、多種多様な悲劇が描かれる。大団の間に挟まれて翻弄される国家とその国民の悲劇はあまりにも理不尽。本作を観れば「憲法9条さえ守れば、平和が訪れ日本国は安泰だ」とする議論の空虚さと不毛さは明らかだ。

カティンの森の「真相」が映画史上はじめて登場するラスト30分は衝撃的。ドイツ軍によってカティンの森に眠る数千人のポーランド人将校の死体発見は43年4月だが、その責任はどこに？ ま

大阪日日新聞 2009(平成21)年12月12日